

青田昌秋

北海道立オホーツク流水科学センター所長
あおた まさあき

Masaaki Aota



やっぱり、ふるさとの歌を 歌える子どもたちじゃないと かわいそうなもの。

流水とガリンコ号

2006年の紋別の「海明け」は2月17日で、網走地方気象台紋別測候所の観測史上2番目に早いという。何しろ接岸初日が2月8日、その後10日ほどで海明けなのだから、異例の早さといってもいい。道立オホーツク流水科学センター所長、「流水博士」の青田昌秋先生になぞねてみた。地球温暖化の影響がここにも？

「この気温が高いからといって、世界中の気温も高いとはいえない。ただ、北海道の流水は世界的に見れば南限にあたるわけだから、温度変化に敏感に反応する。北海道の流水はかろうじて凍っている状態。だからちょうど温暖化でも海水が凍らなくなる。凍ったとしても流水の勢力はぐっと小さくなる。だから、この流水は高感度の温度センサーといえますね。早く流水が去ると『海明けだね、今年は春が早いね』という。海明けという言葉は、本当に希望の持てる言葉だ。アメリカジャブレイク・アイスという。氷が砕ける。なんて、品のない(笑)。ブレイク・アイスを「蹴し、博士は呵呵と笑う。

青田先生からホメられると、「海明け」も幸せだ。さて、世界地図を広げてみよう。オホーツク海の全貌

海明けは希望の持てる言葉